



TITLE:

Role of Attitudes and Norms for Students Car Ownership Intention(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

PRAWIRA, FAJARINDRA BELGIAWAN

CITATION:

PRAWIRA, FAJARINDRA BELGIAWAN. Role of Attitudes and Norms for Students Car Ownership Intention. 京都大学, 2015, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18965>

RIGHT:

許諾条件により本文は2015/10/01に公開

京都大学	博士（工学）	氏名	PRAWIRA FAJARINDRA BELGIAWAN
論文題目	Role of Attitudes and Norms for Students Car Ownership Intention (学生の自動車保有における態度や規範の役割)		
(論文内容の要旨)			
<p>多くの発展途上国では、急激なモータリゼーションの進展による様々な問題が顕在化しているが、その原因として若年層の自動車保有に対する意向・意欲が高まることが寄与してしまうことも考えられる。本研究では、発展途上国と先進国の双方を分析の対象に、自動車保有に対する意識・行動についての問題を取り扱っている。</p> <p>第1章では、本論文の背景として、インドネシアでは自動車保有台数の急激な増加に直面している現状を示した上で、途上国における若年層の自動車保有に対する意識が重要であるという課題認識のもと、発展途上国と先進国の双方を分析の対象に、自動車保有に対する態度・心理的要因を明らかにするとともに、インドネシアを主な対象としつつ、発展途上国での自動車保有抑制政策に関する知見を得るという本論文の目的が明示されている。</p> <p>第2章では、自動車保有に関する集計的及び非集計的モデル分析に関する研究や、心理的な意思決定構造に関する既往研究を整理した上で、それらを通じて本研究の位置づけ等を把握している。そして、これらの知見を踏まえた上で、本論文の目的に照らし合わせて本研究の方針が示されている。</p> <p>第3章では、人々の自動車保有意向に対する社会的規範や群衆効果の役割に関する既往文献のレビューを行い、交通計画学の分野においてもこれらの効果について実証的な知見を得て議論されていることを確認している。</p> <p>第4章では、近年、自動車为主要交通手段となりつつあるインドネシア国・バンドン市の大学生を対象に調査を行った。自動車に対する心理的態度が、自動車保有行動における重要な規定要因である仮説のもと分析を行った結果、自動車移動における“独立性”や自動車を保有することについての“優越感”等が、自動車保有行動の主要要因であるということが示唆された。</p> <p>第5章では、自動車保有動機についてのさらなる一般的知見を得ることを目的として、日本、オランダ、アメリカの3つの先進国と、台湾、インドネシア、中国、レバノンという四つの発展途上国を対象とした調査を行い、分析を行っている。その結果、発展途上国と先進国の間には、自動車保有の動機を規定する要因について有意な差異が存在することが示されている。すなわち、先進国の学生の自動車保有動機は相対的に低いことが示された。</p> <p>第6章では、選好要因として、象徴的感情要因、移動時の独立性要因、他者からの自動車保有期待等を想定した、自動車保有動機を説明するオーダード選択モデルを構築し、分析を試みた。その結果、他者からの自動車保有期待が重要な自動車保有動機の要因であるということが示された。さらに、他者からの自動車保有期待と、その他者の影響の強さ（本研究ではそれを主観的社会規範と呼称している）との相互作用を考慮した分析を行い、その結果、主観的社会規範と他者からの自動車保有期待の交互作用が、自動車保有動機に有意な影響を与えていることが示唆された。</p> <p>最後に第7章においては、第6章までの分析で得られた知見から結論づけを行い、また、政</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	PRAWIRA FAJARINDRA BELGIAWAN
<p>策展開に向けた議論を展開している。それぞれの国の交通状況に非常に大きな影響を及ぼしている自動車保有行動が、自動車の値段や利便性といった経済学的な知見のみならず、本研究で明らかにした、社会心理学的な態度要因や、社会学的な人間関係に依存した社会規範に依存していることから、そうした社会心理学的、社会学的要因に配慮した諸対策が、それぞれの国の自動車保有状況や交通状況に影響を及ぼすためには必要であることを提言している。</p>			

氏 名

PRAWIRA FAJARINDRA BELGIAWAN

(論文審査の結果の要旨)

多くの発展途上国では、急激なモータリゼーションの進展による様々な問題が顕在化してきているが、その原因として若年層の自動車保有に対する意向・意欲が高まることが寄与してしまうことも考えられる。

本論文では、以上の問題意識の下に、急激な自動車保有の増加を抑制し、持続可能な交通手段へのシフトを促進するための基礎的知見を得るため、若年層の自動車保有に対し態度・規範が与える影響や要因を明らかにすることを試みているものである。

その結果、第一に、インドネシアのバンドンにおける若年層の自動車保有に関する調査・分析の結果から、自動車移動における“独立性”や自動車を保有することについての“優越感”等が、自動車保有行動の主要要因であるという知見を得ている。

第二に、日本、オランダ、アメリカの3つの先進国と、台湾、インドネシア、中国、レバノンという四つの発展途上国を対象とした調査を行い、分析を行った結果から、発展途上国と先進国の間には、自動車保有の動機を規定する要因について有意な差異、すなわち、先進国の学生の自動車保有動機は相対的に低いという示唆を得ている。

第三に、選好要因として、象徴的感情要因、移動時の独立性要因、他者からの自動車保有期待等を想定した、自動車保有動機を説明するオーダード選択モデルを構築し、分析を行った結果から、他者からの自動車保有期待が重要な自動車保有動機の要因であるという知見を得ている。

第四に、他者からの自動車保有期待と、その他者の影響の強さ（本研究ではそれを主観的社会規範と呼称している）との相互作用を考慮した分析を行い、主観的社会規範と他者からの自動車保有期待の交互作用が、自動車保有動機に有意な影響を与えていることが示唆されている。

以上のとおり、本論文では実証的研究を踏まえ、発展途上国における持続可能な交通政策を推進する上で課題となっている若年層の自動車保有の心的要因を心理学理論を踏まえつつ実証的に分析したものであり、既往の研究では類を見ない知見を得ているものである。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年2月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。